

火起こしの技の獲得 森のようちえん ねっこぼっこ（愛知県春日井市）

<保育の意図>豊かな自然体験をする中で、子どもたちが主体的に、心ゆくまで自分の力を試し、発揮して、様々なことに気付き、学んでいくことを大切にしている。そのため、“とことん待つ”という姿勢で保育を展開し、子どもたちが体と頭と心を使って様々なことを獲得する過程を大事にしている。

<火起こしの実践>

火起こしが誰も出来ないという状況の中で、果たして子どもたちはどのようにして火起こしの技を培っていくのだろうか。日々の野外料理の記録をもとに、火にかかわる子どもたちの変化を捉え、子どもにどのように科学する心が育っていくかを考察する。

『ねっこぼっこ』の野外料理における 理想的な火起こしの手順

- 燃料準備 ...森で乾いた葉・枝をたっぶり集め、ノコギリ・ナタで薪を割っておく
- 燃料セット ...炉に葉などをセットする その上に木を組んでおくとより効果的
- 着火 ...マッチで下の方の葉へ
- 随時、燃料投入 ...火の勢いが良くなったら、細い薪から順にくべる
- 火の管理 ...火を絶やさないように、薪をくべる

5歳児 = A児 4歳児 = B児、C児、D児 3歳児 = E児、F児、G児、H児、I児



【事例1-1】新年度2回目の野外料理（4月）

前回とは違って、朝から炉で火を起こす一生懸命な子どもの姿が見られる。炉には全く近付かず、森の中で遊ぶ子どももいる。

うまく火がついたり、その後、消えてしまったり、5歳児と4歳児が苦戦しながら根気よくがんばっている。そこに負けじと3歳I児も仲間入りする。

4歳B児は初めて、始めから終わりまでずっと炉の前で火の番ができた。（せっかくなついた火も、落ち葉や枯れ木が足りなくなって、消えてしまうので、大人も落ち葉や枯れ木集めを手伝う）時間が経つにつれて、お腹すいた～の音があちらこちらから聞こえる。炉の前にいるメンバーはおやつを食べるのも忘れて頑張り続けた。

【事例1-2】「今日はついに食べられないか！！」（6月上旬）

6箇所ある全ての炉を使って、思い思いにマッチで葉っぱに火をつけるまではすぐにできるが、その後の育て方をわかっている子がまだいない。パーっと大きな火が上がって満足すると、その場を離れてしまうので火が消えてしまう事態が続出。結局、全部の炉の火が消えてしまった。

この時点で11時。さて、どうする？子ども達は炉から離れてこの状況を把握していない。

そこで、「相談があるんだけど」という保育者の所に集まった子どもたちに、「今、全部の炉の火が消えてしまったこと」「このままだと今日のお昼ご飯は、食べられないこと」を伝える。

そして、もう今日は疲れるからやめようか・・・と投げかけたところ、

C児：「いやだ！やる！！」 M児：「私は、木を集める」 D児：「マッチやる」

A児：「僕、葉っぱ集める」と、自分たちから言葉が出てきた。

まだ、ひとりで最初から最後まで火を育てることはできないが、個々の得意分野で役割分担して、ひとつの火をみんなで協力して育てる方法を子どもたちは編み出した。

3歳児がお腹を空かせて大泣きしたり、ぐずったりする中での再挑戦となった。

森に入ってA児、C児、M児は山盛りいっぱい葉と枝を集めてきた。D児がそれに火をつける。木材を大人たちがナタで割る。緊張感あふれる空気の中、集中力と気合の入り方がこれまでとは違った。



環境の再構成 以前炉の数を限定した時、当然炉の真ん前を5歳児が独占して、年下の子どもは5歳児のやることを見ていることになり、そこで知らず知らず多くのことを吸収していた。「火起こしをやりたがる子には、どれだけでもやりたいたいだけ経験させてあげよう」という、これまでの取り組み方から、「使用する炉の数を限定して、連携しないと出来ない状況を作り、他の子どもがやることを見て学ぶ経験を、意図的に作る」という環境の再構成を図る。

【事例2 - 1】達人現る！！道は拓けるか？（6月中旬）

今日は卒園児のS君(現在小学2年生)が、学校が休日のために特別参加してくれたので、S君の火起こしの様子をみんなに見てもらおう。

朝の会のあと、S君の火起こしが始まる。それをじっと見守る4歳児と5歳児。

S君は家からちゃんと火起こしに使える木と竹の皮を用意して来ている。夕べ雨だったから、彼なりに考えて準備してきたのだ。気合の入りが、ねっこぼっ子たちとは、明らかに違う。木材を立体的に積み上げ、空気の通り道を作り、下の方には火つけ用の乾いた笹や落ち葉を入れる。すぐに火がつき、あれよあれよという間に大きく育っていく。S君が森のようちえんで自ら苦労し獲得した技術と知恵は、忘れ去られることなくいまだ生きている。

S君のデモンストレーションが終わり、今度はねっこぼっ子たちが火を起こす番。D児が早速始める。S君をまねて木片をピラミッド型に組もうとするも、枝の長さが炉に合わず断念。落ち葉と少量の木片を入れて火をつけるが、昨日の雨で落ち葉が濡れていて火が消えてしまい、D児はとっっても苦労する。

「今日は火はやらない」と宣言したA児だが、火の様子が気になるのか、遊びついでに小枝を集めて持って来る。

【事例2 - 2】伝承されゆく達人の技（事例2 - 1の翌日 6月中旬）

野外料理を二日続けてするのは、4月からのメンバーでは初めてだが、朝行くとすでに5歳児A児と4歳児D児が炉に枝をくべ、木材をくべ、作業を進めている。(前回のA児は火を育てるプレッシャーで辛そうだった。今日は二人とも落ち着いている感じ。昨日来た卒園児S君の影響か?! 巧みな技を盗み見る機会も大事だと感じた。) A児とD児の火はやはり順調に育った。

分析 S君の技を盗み見た、ねっこぼっ子たちは、やみくもに葉っぱだけを燃やしていた段階から、木をくべるとは会得した様子である。でも、どのタイミングで、どんなふう、どんな木をくべればいいのか、まだよく分かっていない。そと、火を移らせる必要があることが分かってきた、D児。いきなり大きい木を入れたのでは育たないことが分かってきたA児。この二人のペアは、早くに火がついた。



【事例3】A児の変容と理解（7月）

3歳G児とH児がお手上げ状態のところへ、遊びに夢中だったA児が炉へ来たので「火が消えちゃったんだ、A君つけてよ」とお願いした。

A児はしゃがんでマッチを擦り、火を炉の中央下部へ入れる。火は大きくないが、内部で燃えている様子で煙があがる。そこへ、しゃがんだままウチワを手にし、下の方から小刻みにウチワを仰ぎ、風を注ぎ込むように入れる。次第に火が大きくあがると、それに合わせて自分も立ち上がり今度は大振りウチワをあおぐ。火をいれる位置、風の入れ具合など、的確な動きで進めていたのでそれで満足したか、ここから火を育てて失敗するのが嫌なのか、別に火に執着していないのか再び遊びに行ってしまう。野外料理でない日の散歩中に、薪にぴったりの乾いた枝を見つけては、拾い集める姿も見られる。

このように火起こしのことは気になってはいるものの、苦手意識がまだ勝っているようだ。大人の意図することを無意識に感じ取ったり、思い通りにできないことへの葛藤も抱えている様子である。

分析 火起こしでは、道具も色々使いこなさなければならない。うちわ一つ取ってみても、ただ扇げばいいのではないことは、G児とA児の記録から分かる。闇雲に扇げば火は消える。組んだ薪の下の方から、上手に空気を送ってやると、消えかけた火も大きく育つ。このような経験と、うちわを握る手を自在に動かす器用さが求められる。火の状態を見極める科学する眼が必要とされる。

みどころ

「火起こしができるようになりたい」という思いと「火起こしができないと、その日の食事ができない」という現実、子どもたちに大人の力を借りずに自分たちで行動するという意欲と、技を獲得するための好奇心や根気強さを引き出しています。そうした子どもたちだからこそ、火起こしをやって見せる小学生の存在は、見逃すことのできない注目すべき環境になりました。

それをきっかけに技の獲得ができた5歳児が、またそれを示すかのように、年下の子どもにかかわっています。言葉では伝えられない“伝承の技”が、こうして子どもたちの中でも行われていること、その中で「科学する心」が育まれていることが熱く伝わってきます。